

若者が胸張る わが村を



2019年に福島県の南方部出張型政策研究会により自治体職員を対象としたバックキャスト思考の研修が行われた。持続可能な未来の暮らしとは何か。本質を問う問題提起で始まった。私はそこで講師をさせて頂いた。未来の暮らしを描くことは簡単ではない。今見えている社会の延長線上を描いたとしても、失われていく多くの物事を考慮すると、より心豊かな暮らしになるとは思えない。未来を描いたことがある人ならすぐに気付くはずだ。問題解決ばかりが気になり、新しい価値創出やウェルビーイング(心身の幸福)のことが後回しになってしまう。結果として、どこかワクワクしない。バックキャスト思考は、このような時に未来の環境制約を条件として心豊かな

未利用資源を活用する 美食地政学

▷11

イベント参加賞はずっしり重たい白菜！(鮫川村提供)

暮らしやウェルビーイングを描き、未来のありたい姿を想像する手法である。未来のありたい姿は自動的に導き出されるものではない。議論を深めながら多くの人が望む新価値がイメージできれば第一関門突破である。描いた後は、地域の人たちがその実現に向けて主導していく。

しかし、少子高齢化が進む地方では活動家の数が減少している。コミュニティが希薄になっている。なぜ田舎の美しい地域の景観が保たれているのかが意識されなくなっている。自治体は世代間のつながりを強固にし、地域活動を活性化させ、未利用になりつつある足元の自然資源を再評価するために、住民の背中を押さなければならぬ。今は競争社会である。持続可能にするためには、自分らでつくり、壊れたら立て直し、無理なく、楽しみながら変革を進める必要がある。

「ありたい未来」自らの手で

立て直す活動も心豊かでないといけない。



東京都市大学環境学部 環境経営システム学科教授 古川 柳蔵

ふるかわ・りゅうせう 72年(昭和47)東京都生まれ。博士(学術)。東京都市大学環境学部環境経営システム学科教授。専門は環境イノベーション。戦前の暮らし方、自然に学ぶものづくり、ライフスタイル変革の研究や地方・都市連携プロジェクトを行う。

バックキャスト思考の研修に送り込まれた鮫川村の2人の若手職員が鮫川村のまち・ひとしごと創生総合戦略目標とバックキャスト思考をつなぐことになった。この研修がきっかけとなり、豊かな村をつくるための学びの場である若者未来創出会議が発足された。若者が集まり、バックキャスト思考で未来の村のありたい姿を議論し、そのための第一歩となるイベントを企画した。11月3日、一つのイベント「2022ロゲイニング in Samegawa」鮫川村の新しいものを発見しよう」が開催

プロジェクト、他地域に波及

村の中心にある鉦山公園内にある自然の中で鮫川村の人と交流し、スポーツ系イベントやジャーシー牛乳を用いたバターづくり体験、竹鉄砲などを用いた遊びをしながら、鉦山公園内の写真撮影スポットを回っていく。写真撮影スポットはイベントスタッフが自ら見つけて選定したものだ。鉦山公園からの眺望は美

- ④ロゲイニングイベントのアトラクションでは竹鉄砲が大人気(鮫川村提供)
- ⑤歩き始める参加者(鮫川村提供)



しい。鉦山には室町時代から戦国時代にかけて「赤坂城」があった。山はアップダウンが激しく、城として最適だ。今、その山は役割を変えロゲイニングとして活用されている。イベント終了後もアフターロゲイニングとして、住民が楽しめるようにした。何よりもイベントスタッフが楽しめることを心がけた。

ロゲイニング終了後に振る舞われたのが、スタッフの親戚が育てた大根や白菜の入ったシチュー、スタッフが生産しているイチゴのジャム、副村長が育てたサツマイモのおすそ分けであった。美食を通して関係者が広がっていく。

宮城県東松島市と三重県志摩市を拠点として実施されているJSTの「美食地政学に基づくグリーンジョブマーケットの醸成共創拠点」プロジェクトは他地域に波及している。本稿では福島県鮫川村における未利用資源を活用した未来の暮らしづくりの事例を紹介しながら、バックキャスト思考や未利用資源の活用がどのように地域の自然資源を起点に新価値創出につながっていくのか考えたい。



イベント当日の鉦山公園はきれいに紅葉(鮫川村提供)



観光客を増やすことを第一目的にする、このようなイベントは生まれない。なぜならば、都市部の観光客のニーズを満たそうとし

「地元大好き」若い人の思いを実感

未来の暮らしづくりのために発足した若者未来創出会議や未利用資源を活用した地域活動について、鮫川村役場総務課企画情報係長矢吹直美氏に話を聞いた。

一若者未来創出会議を発足したのはなぜですか。

「鮫川村のまち・ひとしごと創生総合戦略では、『住民が幸せを感じながら豊かに暮らす』ことを目指しています。その後、村の未来を描きたいと思い続けています。アイデアやありたい姿は数多く頭に浮かぶのですが、村の人が納得する未来を描くのは難しいというのが実感です。かつて『若い人たちが何を考えているのか分からない』といった言葉が職場で聞かれた時、職員は自ら若い人たちと話をし、聴く力をつけなければならないと思いました。そんな中、2021年度に若者未来創出会議が発足しました。私は村の皆さんと話すのがとても好きなので、いろんな話をしているうちに、若い人たちをもっと知ってもらおうという思いと共に、もっともっと若い人たちが自分をPRできる場を作っていこうと考えてやってきました。実際、若い人たちと話をしていると皆すっかり地域を考えていて、地元のことでも大好きでいてくれることが分かります。村の若い人たちはとても輝いています。若者未来創出会議で『未利用資源って何だろう』と考えた時には、皆さんから本当にたくさんのアイデアが出てきました。今あらためて若い人たちの今の気持ちを実感することができてとっても楽しいです」

一幸せを感じながら豊かに暮らすとは。「地元の人が幸せを感じるのには本当に小さなことです。ちょっとしたことで人は笑顔に



鮫川村役場総務課 企画情報係長 矢吹 直美氏

次の挑戦は「女性が輝く村」

変わります。小さな成功体験の積み重ねが、一つひとつの笑顔となり、地域の団結力につながると私は考えています。未利用資源という言葉に出会って、私には鮫川村自体がまさに未利用資源だと気がきました。鮫川村は村民の手入れによって美しい里山景観が保たれています。それこそがとても価値あることだと、もっと多くの人に気付いてほしいと思っています。村の地域資源に気付き、価値を理解し、その暮らしを楽しむこと自体に心の豊かさが生まれると思います」

一今後はどのようなことに挑戦していきますか。

「女性の輝く村をつくりたいと思っています。まだまだ村の価値を伝えきれていません。地域の輝く女性たちと一緒に地域づくりを始めたいです。そのために自分をもっと磨き、地元で頑張っている女性たちを村外にどんどん発信していきたいです。鮫川村美人を世界に発信していきます」

(聞き手・古川教授)

住民本位の幸せ、発想の起点に

若者未来創出会議の中で、JSTの「美食地政学に基づくグリーンジョブマーケットの醸成共創拠点」プロジェクトの未利用資源の活用を紹介したことで、地域の未利用の自然資源に目を向けることになった。バックキャスト思考の最大の強みは未来に輝く新価値、すなわち制約の中の豊かさを見つけることにある。それは足元に存在する。この豊かさは利便性・効率化とは無縁である。未利用資源は未来の新価値創出の源になり、関係者をつなげ、新しい価値観を広めていく。鮫川村では「未利用資源ならうちにもありますよ」と声がかかるようになった。視点が変わってきた証である。